

編 集 後 記

< 崎 田 隆 夫 >

本号の綜説は、直視下診断法である。常岡、竹本、信田、城所、春日井と、この道の第一人者による各論文は読者にとり貴重な教科書ともいふべきであろう。生検を中心に、洗滌ならびに吸引細胞診、色素法等々詳説されているが、この面での今後の進歩は、胃疾患の診断より一歩を進めて治療の面に進むことになるであろうと、その期待は大きい。

名尾博士は「潰瘍性大腸炎の内科療法」について、すぐれた論文をよせられたことを感謝したい。

展望では、田坂博士に長年の経験による「腹部臓器の動脈撮影」をご執筆いただいた。熟読いただきたい。

症例は3例、何れも立派である。

研究では、胃微細レリーフ像について、群馬大学放射科、斎藤氏らより論文がよせられた。

技術解説は、昭和大学外科、品川区医師会臨床検査センター鈴木氏より、「私のレントゲン検査」がよせられた。

座談会「直視下診断法」は石原教授の司会である。従来座談会はなべて好評のようであるが、本号もそのように、好評であることを確信できて嬉しい。

各地の研究同好会の紹介も、楽しい記事である。

さて、本誌は、今後どのような道を進むべきであろうか。このまま、真直ぐひたすらに進んでもらいたい、という答が大半かもしれない。

「もっと肩がこらずに読めるよう」これは当初からの大切な要望事項の1つであるが、いつまでも重要事項である。ここらあたりで、かくあるべしという読者の積極的な御意見を多数いただきたいものである。

< 編集 > 早期胃癌研究会